

特別講演 1

「最近のうつ病治療における話題」

敦賀温泉病院

玉井 顯 先生

うつ病は、2020年には世界で最も多い疾患になるとWHOは推測していますが、現時点でもすでに、精神科のみならず全ての科が知っておかなければならない common disease となっています。

うつ病はメランコリ型、いわゆる真面目なタイプの典型的なうつ病がこれまで多かったのですが、近年「自称うつ病」とも言われるディスチミア型うつ病や「不真面目タイプ」、いわゆる非定型うつ病が外来でも多くみられるようになっていきます。

薬理的側面から見るとセロトニンが低下すると憂鬱なうつ気分になります。また、ノルアドレナリンが低下すると意欲が低下します。抗うつ薬については、以前は三環系や四環系の抗うつ剤が主に使われていました。これらの薬は気分系や意欲系以外の神経伝達物質にも広く作用するため、排尿困難や便秘、口渇、パーキンソン症状などの副作用が多いため大変使用しづらいものでした。しかし、近年登場した抗うつ剤、SSRIやSNRIは、1つあるいは2つの神経伝達物質にだけにしか作用しないもので、副作用が大変少なくなりました。あまり言い例えではありませんが、ピンポイント爆弾のようなもので、SSRIはセロトニンだけに効き、他の神経伝達物質は攻撃しません。このため、余分な副作用があまり出なくなりました。またSNRIはセロトニンとノルアドレナリンだけを刺激するというもので、これもまた副作用の少ない抗うつ剤です。

このほか、うつ病の症状や抗うつ剤の使い方、ご家族・患者さんへの対応の仕方、指導のポイントなどを当日お話をさせていただきます。